

夢窓國師と興禪護國

一 井 明 文

中世期に於ける佛教、所謂鎌倉時代、足利時代の佛教は隆盛を極めた。就中禪宗殊に臨濟禪の發展は凡ゆる文化に貢献をしたのであつて、この方面では、曹洞黃檗を凌駕してゐる。建仁寺榮西禪師に依つて禪宗が提唱された時代は天台宗、眞言宗より猛烈な壓迫を受けて彼我の間に軋轢を生じ、純粹な單傳直指の妙法即ち達磨宗を弘布する事が出來ず、天台、眞言、の分子を包含した禪宗で有つた。然し乍ら中世期即ち鎌倉時代になつて、宋國より蘭溪道隆、祖元子元、の二大徳が來朝し幕府の歸依を受けるに至つて純粹の禪宗が發展の段階に入る事が出來たわけである。祖元の高足佛國々師が、蘭溪の高足大應國師が、佛國々師は那須の雲巖寺、大應國師は博多の崇福寺に於て、東西相並んで法鼓を鳴らされた。佛國々師の高足夢窓疎石禪師、大應國々師の高足宗峰明超禪師が、俱に京都に於て禪宗史上黄金時代を築き上げ、殊に夢窓疎石禪師は七朝の天皇より御崇敬を受け、當時禪宗の上で重要な地位を占めておられた。所謂七朝國師は申すまでもなく夢窓國師を申上げるのである。

國師は宇多天皇九世の孫に當らせられ、母は平氏、觀音に禱つて後宇多天皇建治三年十一月朔日、伊勢國河藝郡合川村佐々木朝綱の邸にて御生誕になつた。十八歳にして天台、眞言を研究されたが、生死の問題に逢着すると、何等益する事なかつたので、之れを捨て、禪宗に入門せられ、建仁寺の無隱圓範禪師に學び、然る後佛國國師に就いて實參實究辨道に精進し遂に佛國々師の印可を受けられたのである。時の執權北條高時夫人覺海が國師を鎌倉に招かれた時、國師は土佐國吸江菴に隠れたのであるが、遂に覺海夫人の懇請に應じて、國師は横須賀に泊船菴を建立して住處とせられた。蓋し國師の風格顯榮の人に接するを好まれないと云ふ事は明らかである。

鎌倉幕府末期に際して國師は皇室並に幕府重臣に對して陞座說法せられ、特に後醍醐天皇との關係が厚かつた。夢窓國師はまた南禪寺に幕府の嚴命に倚りて住山、鎌倉の淨智寺、瑞泉寺、圓覺寺、甲斐の惠林寺に住山、其後執權高時が夢窓國師を建長寺の住職に願つたけれども幕府の末路を先見されたのであらう應ぜられなかつた。後、建武中興の代となり足利尊氏との關係が始まり、後醍醐天皇は尊氏に命じて國師の爲に龜山法皇の御離宮を臨川寺と改めて國師を住山とせられた。

建武元年九月、後醍醐天皇は國師に衣鉢を受けて弟子の禮を執られ、南禪寺に再び任命をもたれ、畏くも天皇は南禪寺に行幸せられ二日間御駐輦になつたのである。

かくて夢窓國師の徳風が天皇並びに將軍間に如何に敬慕せられておつたかを知る事が出來、建武

中興の原動力として、國師の法力は尊い礎となつたことを知り得る。北條氏の滅亡によりて禪宗も一時影をひそめた感があつたが、國師の南禪寺再住によりて専心禪宗復興に責任を持たれたので、禪宗は益々隆盛を極めた。天皇は建武二年十月十一日國師を臨川寺開山とせられ、御宸翰を賜り、夢窓國師の號を賜つたのである。生前に於いて國師號を下賜された事は國師が朝廷より如何に親任を集めてゐたかを物語るものである。

其後建武中興の大業が敗れて後醍醐天皇か度々尊氏の爲に種々御難儀に遭はれ、尊氏、義貞との衝突より官軍と尊氏との争となり、尊氏は京都で義貞と戦つて敗北した。時に國師は南禪寺を退山された。何となれば國師は尊氏の推舉に依つて後醍醐天皇との關係が深くなつた事を御考へになり、尊氏敗北の爲に苦境にたゝれたのではないかと考へられる。

斯様にして禪師と尊氏との關係は深まつたが、尊氏が大軍を以て東上したゝめ、湊川にて楠正成戦死をなし、後醍醐天皇も遂に京都を離れられたことは周知の事實である。尊氏は、かやうに逆賊ではあつたが、國師に對する歸依は篤かつた。それは尊氏が國師の高徳を慕つて入門してより益々敬慕の念止む事なく、國師の爲めに京都に於ける軍兵の臨川寺を侵略する事を嚴禁した文書が残つて居るによつても知り得る。國師は尊氏に勸めて日本各所に利生塔、安國寺を建立せしめられた。夫れは多年兵亂の巷と化して幾多の將士を殺した罪障消滅の爲に或は又元弘以來の戦死者の菩提を

追福された結果に外ならないのである。曆應二年後醍醐天皇崩御せられるや、尊氏は直義と俱に北朝の光嚴上皇に奏上して後醍醐天皇に對し奉り、自己の罪業を深謝する目的で天皇の皇居たりし龜山殿を曆應資聖禪寺と名づけ、夢窓國師を開山として迎へ、後醍醐天皇の御冥福を祈られた。國師は語録の中に、「此乃積劫業績之使然也。業績因由非亦他作。只是一念無明之所感也。」と述べてゐる。

右の語録に依ると、國師自ら、吉運の窮つた原因は「只是一念無明所感」と喝破され、大將軍尊氏、左武衛將軍直義をして慚愧心を起さしめたことが窺はれる。國師は尊氏をして元弘以來の行蹟、殊に後醍醐天皇に對しての行動を深く悔恨陳謝すると同時に一切の陣歿者の靈魂を追福するの目的を以つて、前述の利生塔、安國寺を建立せしめたのである。我々はこゝに尊氏、直義をして過去の罪業を懺悔して悔恨の情、陳謝の誠を起さしめたのは、勿論、夢窓國師の説得の然らしむる所で有つたことを銘記せねばならぬ。

尊氏兄弟の佛教信仰に關しては彼等の信仰によつて、自發的に、或は清水寺に觀音を信仰し、或は地藏尊を畫いたことや、或は尊氏、直義は國師と共に寶積經を筆寫し、日に政務の餘暇には參禪辨道を怠らず自己究明に心を専らにした事等を綜合して觀察する時、佛教特に禪宗史上重要な役割を演じたことは否定されない。これ皆國師の薰陶の然らしむるところである。斯くの如く後醍醐

天皇を始め奉り、尊氏、直義、の歸依を受けられたばかりでなく、北朝の天皇、光嚴上皇、光明天皇、皇室から御歸依を受けられ各々衣鉢を受けて屢々法を聽かれたと云ふ事である。觀應元年國師が病氣に罹られた時には畏れ多くも朝廷より侍醫を御差遣になり國師の病氣が癒つたと云ふ事である。斯かる状態から考察しても如何に重用されたか窺はれる。

又語録に依ると尊氏が國師に文書を送り末代迄天龍寺に歸依し若し子孫にして不義違亂を起すあれば不孝義絶の者たる可しと言ふ事が後醍醐天皇の法會が北朝に於て營まれた時尊氏が文書を天龍寺へ提出して居る。尊氏が國師を信仰し、尊崇せし事が更に了解出来る。

足利尊氏に關しては種々論議されて居るが、足利尊氏の信仰心に依つて佛教史上では親しく夢窓國師の薰陶を受けて禪門に歸依して當時の禪宗の上に武門として偉大なる功績をたてたことは認め何等差支なき事ではなからうかと思ふ。日本佛教史上に於ては禪宗隆盛時代、夢窓國師の徳風と共に黄金時代の基礎を築いた武士として忘却する事は出来ないのである。後醍醐天皇の御冥福を祈る目的趣旨の爲に建立された大本山天龍寺こそ尊氏の悔恨懺悔の情の發露でなければならぬ。夢窓國師も當時南朝と北朝の争に關しては相當日夜御心配になられた事と思ふ。尊氏の信仰は何處迄も國師の薰陶に預つて力ある事を忘れてはならないのである。

夢窓國師は朝廷武家に尊崇せられた事は單に佛教上ばかりでなく、政治方面にも及び、尊氏兄弟

と高師直との不和を和睦せしめ、最も重要な事は南朝、北朝、の和睦斡旋の勞を取つたと云ふ事である。南北朝對峙して幾萬の生靈が命を失ひ、南北兩朝の争、即ち朝廷と朝廷との争を歎かはしく感ぜられたのであらう。夫の和睦が假令一時的にもせよ計畫せられた事は、國師に限られた強さであり、他人の干涉の餘地を見出さないのである。國師が圓滿な性格の持主であつた事が知られる。然しながら國師は自ら進んで朝廷、權勢に近づく事はしなかつた。國師の師匠、佛國々師と同様權勢に媚びる事はなかつたのである。

然し乍ら却つて朝廷の尊崇を國師一身に集め七朝國師の稱號を授けられた。即ち建武二年十月十一日、後醍醐天皇より夢窓國師。貞和二年十一月二十六日、光明天皇より正覺國師。觀應二年八月十五日、光嚴上皇より、心宗國師。延文三年九月六日、後光嚴院より普濟國師。應安五年九月二十九日、後圓融院より玄猷國師。寶徳二年八月二十七日、後花園天皇より佛統國師。文明元年十月二十七日、後土御門天皇より大圓國師の號を授けられた。斯くの如き例は絶無にして、七朝國師とは夢窓國師に限られてゐる稱號である。

國師の草創された寺院は、三十七歳龍山菴(甲州)、三十九歳、古谿山(濃州)、四十四歳吸江菴(土州)、四十五歳、泊船菴(横州)、四十九歳退耕菴(上總)、五十二歳善應寺(伊勢)、南芳菴(鎌倉)、五十三歳瑞泉寺(相州)、五十六歳慧林寺(甲州)、五十八歳、瑞光寺(播州)五十九歳臨川寺(山城)、

六十一歳淨居寺(甲州)、六十五歳天龍寺(山城)、六十六歳補陀寺(阿州)、等多數に上つてゐる。

尙徒弟教育に力を用ひられ、國師の盛徳一世を風化し、上王公より下士庶人に至る迄、得度入門を求むるもの無慮一萬三千四十五人つたと云ふ事である。就中高徳は、無極至玄。春屋妙葩。青山慈水。徳叟周佐。大法大蘭。觀中中諦。絶海中津等最も有名である。

夢窓國師は斯くの如く天性高潔にして温和な人であり日本佛教史上に於いても國師に匹敵する人物を見出す事は出来ない。將軍に對して精神的影響を與へたこと、換言すれば尊氏直義をして後醍醐天皇に對し奉つて行つた元弘以來の罪業の障滅をなさしめた事は、宗教家としての本分を完全に盡してゐるものと云ふべきである。

實に歴代の聖天子は御一人として佛教の興隆を圖られなかつた御方はない。今暫く他宗は置き、禪宗殊に臨濟宗の方面から論ずると花園法王に於ける大燈國師、妙心寺開山無相大師。後醍醐天皇に於ける天龍寺夢窓國師、大燈國師の如きは、何れも師弟の禮を取られ參禪遊ばされたと云ふ事である。斯様に皇室と禪宗との關係は古來より今日迄一貫して居り、國家を鎮護する事は即ち禪宗を興す事となり、禪宗の隆盛は、同時に國家を鎮護するに外ならないのである。

中世期に於ける禪宗史上、夢窓國師の徳風は四海を風靡して、黄金時代を現出した事は、當時代を代表して七朝の天皇の戒師となられた事に依つて考へられるのである。禪宗勃發して東福寺聖一

國師に朝廷より國師號が御下賜になつてから七百有餘年、歷代天皇は悉く禪門に御歸依になり國師號の宣下は五十餘人に達してゐるので有る。佛教を御崇信遊ばされたばかりでなく皇族方の御入門遊ばされた事は幾許であらう。誠に今日禪宗は皇室の御恩澤に浴しながら、皇室と佛教並に禪門と一貫して尊き歴史が永久に光輝を放つてゐるのである。

現非常時局に當つて萬國無比の國體を興隆發展する事は、日本國民として、宗教家の重大使命である事を自覺して、使命達成に一路邁進すべきであると思はれる。

佛 教 之 要 旨

世の妄想家或は曰く、佛法は文明政治を裨補するの力無く、文明の宗教に適せざる故に理世界智世界の進むに隨ひ蹤を潜めて遠く遁れんと、……汝若し顛倒狼狽の中にも顛倒狼狽せず、災厄疾病の間にも災厄疾病せず、一息斷絶の時にも超然死せざる底の大丈夫の漢とならんと欲せば、須らく三世貫通の活眼を劈開して、獨脱無依の主人公を活捉せよ、此の主人公こそ、前に謂ふ所の天真佛にして、獨此の一地球のみならず、三千大千世界の森羅萬象、有情非情を引包みて遺さざる靈物なれば汝が此上なく思へる理世界智世界は大海の一滴、九牛の一毛にだも當らず、誠に笑止の至りなり。我國には何の幸か天も覆ふこと能はず、地も戴すること能はず、理世界智世界を方寸の中に收めて富貴貧賤も蕩かすこと能はず、白刃威武も屈すること能はざる底の大丈夫を造り出すべき無上妙道あり。之を得て以て大政に參與し之を得て以て外交に施し之を得て以て軍陣に臨み之を得て以て商工耕作に従事せば、往くとして善からざるは無し。果し然らば眞の文明は我國に現出して、赫々の光輝を地球の表に揚げん。國家を尊嚴にし、政治を裨補する、是より大なるはなし。(鐵舟言行錄)